

【研究論文】

美術館の絵本原画展における「えほんのじかん」の実践と学生の学び Practice of “Ehon no Jikan (Picture Book Time)” at exhibition of picture books at art museum, and learning of students

鈴木 穂 波^{*}

SUZUKI Honami

要 旨：

絵本は、一緒に読み合うことで、一人で読むのとはまた違った楽しみをもたらしてくれるものである。また、一冊の絵本に込められた作者の思いや、その表現の豊かさに触れることにより、絵本のもつ奥深さに気づくこともできる。そのため、絵本の研究と実践という両面からのアプローチによって、学生の学びを引き出したいと考えている。本稿では、刈谷市美術館の絵本原画展開催時に会場で行った、岡崎女子短期大学鈴木穂波ゼミナールと、岡崎女子大学・短期大学学生サークル「ホビット」の読み聞かせ活動「えほんのじかん」の実践をもとに、考察を行った。

Abstract

Picture books provide a different kind of enjoyment when they are read aloud together versus when they are read alone. Furthermore, learning about the ideas that authors have incorporated into their picture book and exposing children to the richness of authors' expressions makes it possible to realize the depth that picture books possess. As such, the intention has been to bring about the learning of students based on a two-sided approach of picture book research and practice. In this paper, the topic was considered based on the Okazaki Women's Junior College Honami Suzuki Seminar that took place at Kariya City Art Museum during holding of an exhibition of picture books there, and the practice of “Ehon no Jikan (Picture Book Time),” an activity in which *The Hobbit* was read aloud to children by student clubs of Okazaki Women's University and Okazaki Women's Junior College.

キーワード：絵本、読み聞かせ、絵本原画展

Keyword：Picture books, reading aloud to children, exhibition of picture books

1、はじめに

岡崎女子短期大学幼児教育学科では、第一部学生が1年後期と2年後期に、第三部学生が2年後期と3年前期に受講する「子どもの研究Ⅰ」「子どもの研究Ⅱ」というゼミナール科目を開講している。^(注1)

2013年4月に岡崎女子短期大学に着任し、ゼミナールを開講するにあたり、「絵本」への「研究」

と「実践」の両面からのアプローチを掲げた。その際不可欠となる実践の場については、他のゼミナールでも活用している付属幼稚園や「親と子どもの発達センター」という学内の場は予定していたが、「絵本」という専門分野に特化した独自の新たな実践の場、絵本を通して地域との関わりを持つことができる場が是非ほしいと考えていた。

また、顧問を務めることになった学生の読み聞かせサークル「ホビット」も地域での活動場所に

^{*}岡崎女子短期大学幼児教育学科

乏しい状況にあった。「ホビット」は絵本や紙芝居の読み聞かせを通して子どもと触れ合う活動を行い、自主的な活動による読み聞かせの楽しさの享受と、活動の積み重ねによる技術の向上を目指している。2003年に岡崎女子短期大学の学生サークルとして創設され活動が続けてきたが、2013年に岡崎女子大学が開学し、短期大学生よりも長期に活動できる大学生も加わる中、学外の活動場所がカ所しかなく、活動場所の拡大と大学サークルとして地域貢献の場も望まれる状況だった。

そうした中2013年6月に、刈谷市美術館の担当者から、来年度企画している絵本原画展で、子どもを主な対象として学生に読み聞かせ活動を行ってもらえないかと打診があった。刈谷市美術館は、地方の公立美術館としての役割を踏まえ、「郷土の美術」「近代の美術」「戦後の美術」「現代の美術」「原画」という5つのキーワードが絡み合って形成されたコレクションをもち、雑誌や新聞の挿絵、デザインも含め、さまざまなメディアや芸術分野の企画展を行っている。^(注2)さらに、学芸員の専門性の高さや企画力に裏付けされた企画展も随時開催されている。

地域や大学等と連携し、開かれた美術館を目指すという点では、すでに絵本原画展などでの衣裳展示について、他大学と継続的な連携がなされていた。^(注3)絵本原画展についても、地域の書店やボランティアサークル、公共図書館との連携によって行われている。ただ、近年特に子育て世代へのはたらきかけや幼稚園、保育所との連携にも力をいれる中で、絵本を専門とする教員のもと、絵本を研究的に学びながら実践する学生にぜひ活動してほしいと打診があった。学生にとっても、絵本原画展を企画する美術館という専門性の高い場で実践を行うことができることは、様々な面で大きな力になりうると考えた。

このように、両者の意思が重なり合ってこの「えほんのじかん」の活動が生まれ、2014年度から4回実施している。本稿では、2014年度の「レオ・レオニ 絵本のしごと」、2015年度の「宮西達也ワンダーランド展 ヘンテコリンな絵本の仲間たち」、「イエラ・マリ展 字のない絵本の世界」における「えほんのじかん」の活動を報告し、美術館の絵本原画展における読み聞かせ活動が学生にもたらしたものについて考察していきたい。

2、「えほんのじかん」実施概要

2014年度、2015年度に三つの原画展で実施した「えほんのじかん」の実施日、担当、参加人数等については以下のとおりである。

「レオ・レオニ 絵本のしごと」＜写真1＞

会期：2014年4月26日～6月8日

実施日・担当：

5月3日（祝・土）① 11:00～11:30 ② 11:30～12:00 ③ 13:00～13:30 ④ 14:30～15:00 鈴木ゼミナール 17名

5月10日（土）① 11:00～11:30 ② 13:00～13:30 ③ 14:30～15:00 サークル「ホビット」12名

実施場所：刈谷市美術館2階ロビー

参加者：各回40名程度



＜写真1＞「レオ・レオニ 絵本のしごと」での「えほんのじかん」実施風景①

「宮西達也ワンダーランド展 ヘンテコリンな絵本の仲間たち」

会期：2015年4月25日～6月7日

実施日・担当：

4月29日（水・祝）① 13:30～14:00 ② 14:30～15:00 鈴木ゼミナール 11名

5月3日（日・祝）① 10:30～11:00 ② 11:30～12:00 ③ 13:30～14:00 ④ 14:30～15:00 ①②鈴木ゼミナール8名、③④サークル「ホビット」12名

実施場所：刈谷市美術館2階ロビー

参加者：各回20名程度

「イエラ・マリ展 字のない絵本の世界」

会期：2015年7月18日～8月30日

実施日・担当：

2016年7月18日（土）① 11:00～11:30 ②
14:00～14:30、サークル「ホビット」7名

2016年8月22日（土）① 14:00～14:30、サー
クル「ホビット」4名

実施場所：刈谷市美術館 1階ロビー

参加者：各回10名程度

3、「えほんのじかん」の構成

(1) 参加者について

会期中の二日間を「えほんのじかん」の実施日とし、各回約30分のプログラムを一日2～4回実施している。「えほんのじかん」自体への参加については無料で（ただし、絵本原画展の入場料が高校生以上は必要）、事前申込み制ではなく、当日参加自由である。刈谷市美術館の原画展案内チラシの裏面に会期中のイベントとして紹介される他、美術館のホームページや大学のホームページなどでも案内がなされるが、「えほんのじかん」のみの広報は特に行っていない。

そのため、基本的には原画展の来場者が立ち寄るという性質のものであるが、中には「このために来ました」という親子連れや、原画展観覧の前後に2度参加というケースもある。作成した手作り絵本を持ち帰り、完成させて夏休みの自由課題として提出する予定という小学生もいた。さらに、地域で子どもに向けての読書活動を行っているグループ、他大学の幼児教育や絵本を学ぶ学生や教員、実践を行う学生の出身高校の進路担当教員など、この活動自体にそれぞれの関心を持って来場する参加者もあった。

さらに、チラシや館内のアナウンスでは「小さなお子さんから大人の方まで、〇〇さんの絵本の世界を楽しみませんか」と呼びかけている。親子連れが多数を占めるが、子どもや親子と限定はしておらず、大人一人で、老夫婦で、福祉施設からの車椅子の参加者と介護者など、その顔ぶれは多様である。いわゆる公共図書館で行われる子ども向けの「おはなし会」とは違った様相である。

(2) 場について

さまざまな人が参加しやすい理由として、「えほんのじかん」の場の配置もあげられる。「えほ

んのじかん」は、館内のロビースペースに設けられた「えほんコーナー」で実施している。ここには、原画展の図録や展示されている原画の絵本が並べられ、ベンチや椅子もある。靴を脱いであがれるようにマットを敷いたスペースもあり、子どもが思い思いの姿勢で絵本を楽しむことができる。さらに、ベビーカーを押したまま立ち寄ることも可能である。

例えばマットを敷くなど、このスペースは、打ち合わせの段階で「えほんのじかん」をどのようなものにするか構想する中で考えられている。またこの「絵本コーナー」だけでなく、館内には子どもが作品に親しみをもつことのできるような壁面の装飾や立体展示がされているなど、館内全体に原画に親しみやすい雰囲気が満ちている。こうした壁面などふとしたところに絵本の登場人物を見付けられるなどの工夫が、学生が子どもと触れ合う際のきっかけにもなっていた。

2014年度、2015年度に参加した三つの絵本原画展のうち、「レオ・レオニ 絵本のしごと」、「宮西達也ワンダーランド展 ヘンテコリンな絵本の仲間たち」については2階ロビーに「えほんコーナー」が設置された。「えほんのじかん」開催時は椅子や机を移動させて、スペースを拡げる。壁を背にして座る学生の前のマットの上に子ども、後ろの椅子に大人、そのさらに後ろに立ち見の大人という形だが、オープンスペースのため、途中から加わることも可能で、気軽に足を留めて見入ることができる。当初は展示室まで声が響いて観覧者の邪魔にならないかという懸念もあったが、「えほんのじかん」が原画展会場全体に自然に溶け込み、幼い子ども連れも子どもがぐずれば席を立ち、また戻るなど、出入り自由だが心地よい場が作られていた。（＜写真2＞参照）



＜写真2＞「レオ・レオニ 絵本のしごと」での「えほんのじかん」実施風景②

一方、「イエラ・マリ展 字のない絵本の世界」では、1階のみでの展示で、出入り口から一番離れた奥のスペースに「えほんコーナー」が設置された。（＜写真3＞参照）若干立ち入りにくい場ではあるが、展示されている「字のない絵本」という作品の性質に合った、静かな環境でゆったりと絵本を楽しむことのできる場となった。マットも円形で、「えほんのじかん」の際には学生と参加者が輪になって座り、ほどよい距離感をとりながら行うことができた。



＜写真3＞「イエラ・マリ展 字のない絵本の世界」での「えほんのじかん」実施風景

このように、それぞれの原画展に合わせて「えほんのじかん」の内容や規模を考え、参加者を想定して行うことができるのも、企画段階から打ち合わせを重ねられるからこそだといえる。また、プログラム内容も、場にあったものになるように企画している。

(3) プログラム内容

「えほんのじかん」では、基本的に展示されている絵本の中から、学生が一人一冊ずつを選んで読む。それを30分という時間内に収まること、幼い子どもから小学校高学年の子どもまで楽しめるものになることを考えて、4～5冊の絵本の組み合わせを学生自身が考えてプログラムを組んでいく。また、原画展示のテーマ区分に沿って行ったり、さまざまなテーマにまたがるように組んだりすることもある。それは展示対象となる作品によって変わってくる。

「レオ・レオニ 絵本のしごと」では、絵本の対象年齢や長さに大きな差がないため、テーマを重視してプログラムを組んだ。また、さまざまな動物が主人公になっているため、幼い子どもたちも親しむきっかけとなるよう、どのような動物を組み合わせるかも考えていった。

「宮西達也ワンダーランド展 ヘンテコリンな絵本の仲間たち」は、赤ちゃん向けの絵本から大人向けの絵本まで幅広いため、できるだけ各回ともバランスよくさまざまな対象年齢の絵本が入るようにした。また、大型絵本や作品の着ぐるみなども、それだけが目立ってしまわないように、全体の流れの中をどう作り出すかを考えながら取り入れていった。

これに対し、「イエラ・マリ展 字のない絵本の世界」では、これらの原画展とは異なる形にした。イエラ・マリ（1931-2014）の絵本作品は10冊に満たないが、『にわとりとたまご』（イエラ・マリエンゾ・マリ作、ほるぷ出版）、『あかいふうせん』（イエラ・マリ作、ほるぷ出版）、『まるいまあるい』（イエラ・マリ作・絵、ほるぷ出版）、『とおもったら……』（イエラ・マリ作・絵、ブロンズ新社）などの「字のない絵本」を残している。ことばに頼ることなく、生命の循環や形態の移り変わりを絵が物語るという性質のもののため、そもそも「えほんのじかん」を行うことができるのかという懸念もあった。だが、「字のない絵本」をどのように読んだらよいのか分からないため避けてきたが、この機会にぜひ読んでみたいという学生の声も聞かれたため、どのように読むと読者と分かち合うことができるのかを考えることも含めて、取り組むことにした。

具体的なプログラム内容として、①手あそび
②イエラ・マリ『あかいふうせん』もしくは『に

わとりとたまご』読み聞かせ ③イエラ・マリ作品以外の「字のない絵本」の中から2冊（パット・ハッチンス『なんにかわるかな?』ほるぷ出版、太田大八『かさ』文研出版、など）読み聞かせ ④イエラ・マリ『まるいまあるい』『とおもったら……』読み聞かせ ⑤「○（まる）の絵本作り」の順で行った。③は各回によって入れ替えるが、それ以外は固定のプログラムとした。③で取り上げる「字のない絵本」も、絵本コーナーの作品の中から選んでいる。



＜写真4＞「イエラ・マリ 字のない絵本の世界」展「○（まる）の絵本作り」制作物

⑤の「○（まる）の絵本作り」では、画用紙にあらかじめ○を描いておき、子どもにいろいろなものに見立てて絵を描いてもらった。（＜写真4＞参照）○はさまざまな色で描いておき、イメージを引き出すきっかけになるようにした。一枚の紙の両面に四つの絵を描いて重ね合わせ、輪ゴムで留めて絵本にする。

これは、『まるいまあるい』の次々に丸いものが登場するという展開や、『とおもったら……』の形の変化に刺激を受けて、○からさまざまなものを発想して描いてもらい、それをつなげていくことで絵本にしようというものである。絵本を読み終わった後、学生が実際に描いておいたものをいくつか見せながら呼びかけると、子どもたちは思い浮かんだものを次々に描いていき、重ね合わせたときの左ページと右ページの意外な組み合わせや、ページをめくった時の変化を楽しんでいた。幼い子どもたちは自分の好きな色を塗り、学生が「これなーに?」「△△みたいだね」と声をかけ、そこから絵を描き足していくなどの関わりも見られた。また、○からの変化の連続性を意識して作るなど、一人ひとりがいろいろな展開を楽しむこ

とができ、制作にも幅が生まれた。

課題となっていた、「字のない絵本」をどう読むかということに関しては、イエラ・マリの絵本については、ゆっくりとページをめくりながら絵から感じ取る時間や流れを大切に、読み手が意識的に言葉を挟むことなく、子どもたちの自然な反応に合わせながら読むようにした。イエラ・マリ作品以外の「字のない絵本」については、担当する学生それぞれに任せたとこ、子どもたちに問いかけながら読んだり、自分で物語を作ったり語ったりするなど、それぞれの作品に合わせて、さまざまな読み方を工夫していた。

4、学生の学び

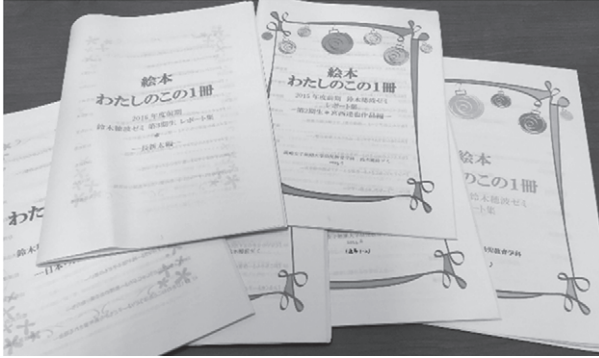
(1) ゼミナールの授業において

この活動においては、授業者である私がゼミナールの学生にどういった力を身につけさせたいかという目的や、学生がこの「えほんのじかん」を通してどのような学びをしたいかという意思を反映しながら企画していくことが可能であった。そのため、ゼミナールについては、「子どもの研究Ⅰ」「子どもの研究Ⅱ」の授業のまとめとしてこの活動を位置付けながら、組み立てている。

ゼミナールではまず、今回の原画展で取り上げられる作家について、原画展の図録なども活用しながらその概要を把握したあと、展示予定の絵本の中から一人一冊選び、作品の分析発表と討議を行っていく。発表時には、最初に絵本を読み、その後、その作品として注目したい点、特徴について分析し、発表を行っている。一人の作家についてとりあげているため、特に、その作家のどういったテーマを表現しようとしているか、またそれをどういった技法で表しているかに注目していく。発表後には、絵本の読み方と、分析の両面について、発表者以外の学生数名がその場でコメントすると共に、私も含め全員がコメント用紙を記入する。コメント用紙は発表した学生に渡し、次のレポート作成に活かせるようにしている。

レポートでは、発表した内容の中から注目したいテーマを絞って論じてもらうが、サブタイトルをつけることから始めている。その作品の全体的な分析だけでなく、サブタイトルとなる切り口を見つけることによって、それぞれの作品のテーマが浮き彫りになることを目指している。最終的に

レポート集としてまとめ、一人の絵本作家について17～18冊の作品をさまざまなテーマで見ることにより、一つ一つの作品だけでなくその作家の作品の全体像も浮かび上がらせるようにしている。(＜写真5＞参照)



＜写真5＞学生のレポート集

研究的視点をもって、作者の意図を読み取り、自分の考察を深めていくことで、学生の絵本についての理解の深まりが見られる。それは、発声や表情、間の取り方、ページのめくり方、提示の仕方など、読み方の変化に表れていく。授業後の学生の感想記録などからも、学生自身がそのことを実感しているのが窺える。

また、刈谷市美術館での実践の前に、付属幼稚園での実践も行っている。美術館での実践と同じプログラム内容ではなく、幼稚園のクラス数や実践時間に合わせた内容で行う。幼稚園では年少から年長まで年齢で分かれているため、それに合わせてグループ分けを行う。そこで子どもたちの反応や、実際に子どもたちと読むことで感じたことを、次の美術館での実践で活かしていくことができるようにしている。

ただ、この原画展での「えほんのじかん」が幼児園での実践と大きく違うのは、特定の年齢層だけでなく、幅広い年齢の参加者が集まるということである。普段、保育園や幼稚園での実習や、サークルでの読み聞かせ活動では、参加する子どもを想定し、幅広い範囲から選んだ絵本を読んできた学生たちからは、最初は戸惑いも見られる。しかし、実践後には多くの学生が、「『絵本は子どもに読んで聞かせるもの』と思っていたが、さまざまな世代で楽しめると分かった。」「『子どものために』だけでなく、まず自分がその絵本と向き合うことが大切だと分かった。」「食わず嫌いせずに

さまざまな絵本を手にとってみたいと思った。」といった感想を書いている。

一冊の絵本とおよそ半年にわたって関わることになるため、自分の選んだ絵本に対する愛着が強くなっている様子も見受けられる。「絵本は好きだがそこまで同じ絵本を何度も読んだことはなかった。実習先などで子どもが何度も同じ絵本を読んできると言ったり、いつも持ち歩いたりしている気持ちが分かるようになった。」といった感想を寄せる学生もいる。

ゼミナールの学生がそれぞれ一冊の絵本を選び、それを授業で発表し、共有しあっていくことの意味の大きさについて触れる学生も多かった。特に宮西達也の作品については、赤ちゃん絵本から大人向きの絵本まで幅広く展示され、学生が選んだ絵本も多岐にわたった。そのため、他の学生が選んだ絵本から刺激を受けている様子も見受けられた。例えば、『シニガミさん』（宮西達也作・絵、絵本の杜、2010年）という「死」をテーマにした絵本については、自分ならば選ばない絵本だったが刺激を受けたという意見も多かった。また、宮西達也作品の強烈なキャラクターや、愛情豊かな表現がとても好みだという学生が大多数であったが、そういったところが苦手な読むのを避けてきたという学生もいた。だが、今回の原画展で様々な作品があることや、作者の作品に込めた思いを知り、一面的なところだけでなく、作者の作品の全体像を知る大切さを感じたという学生もあった。

さらに、自分が向き合ってきた作品の原画を目にすることができるということについては、他の活動では得られないことである。原画展当日の学びとしては、「えほんのじかん」での実践だけでなく、学芸員によるギャラリートークを受講し、作家や作品への関わりを深めることができた。およそ一時間にわたるギャラリートークでは、原画展全体を、原画を見ながら丁寧に解説いただいている。原画そのものを見ること得られる感動ももちろんだが、原画展全体を俯瞰することにより、作家の全体像についても体感して捉えることができる機会となっている。

(2) サークル活動において

サークル「ホビット」の活動においては、ゼミナールのように半年前から絵本を手元に置いて、

研究的に見ていくということは行っていない。だが、それぞれに絵本を読み込んで練習を重ねている。中には原画展に足を運ぶ前に図録に目を通して全体像を把握している学生もあり、自主的に意欲をもって取り組んでいる。また、子どもたちをどのようにして絵本の世界に引き込めるかということについては、絵本自体の読み方だけでなく、導入や言葉かけなどについてもさまざまに工夫をしていた。

2013年に開学した岡崎女子大学の第一期生については、一年生在学時の打ち合わせを経て二年生からこの活動が本格的にスタートし、三年間継続的に参加することができた。特に印象的だったのは、「イエラ・マリ展 字のない絵本の世界」だったようである。サークルにとっては三回目の「えほんのじかん」だったが、「字のない絵本」ということで、どのように行っていけばよいのか戸惑いが大きいようだった。サークルの活動時間に、イエラ・マリの作品や「字のない絵本」を読み重ねていく中で、「字のない絵本」の魅力を感じ、自分なりの読み方を見つけていくことができていった。子どもたちや来館者に、どのようにして伝えたらよいのかということを考えることで、表現の幅を広げることができた、自信につながったという意見や、実際に読み聞かせを行ってみると、言葉が無くとも子どもたちが絵本の世界に入り込んでくれていることが分かった、「字のない絵本」をもっと読み聞かせしてみたいと感じたという意見もあった。三度目の「えほんのじかん」にあたって、「字のない絵本」というテーマは、学生たちの絵本に向き合う姿勢や、その絵本にしっかりと向き合いどう自分が伝えればその絵本の魅力を聞き手に伝えられるのかということを真剣に考えるきっかけを与えてくれた。

また、サークルの学生も、毎回のギャラリートークに意欲的に参加している。原画を間近に見て、絵本が描かれた背景や人物像について知ることによって得られた研究的な見方や、原画展全体の構成や来館者をひきつけるさまざまな工夫など、幼児教育学を学ぶ学生としても勉強になる点が多いようだった。学芸員の豊富な知識量や、説明の的確さについても感銘を受ける学生が多く、幼児教育としての絵本の見方だけでなく、美術館や図書館など、絵本と子どもを結ぶさまざまな場があることを知ることにもなったようであ

る。

学生が担当する絵本は遅くとも三ヵ月前には決定し、それぞれに手渡して、いつでも練習したり、実習の場などでも読んだりできるようにしている。作品選びの段階では、一冊の絵本を自分に任されたという喜びと同時に、プレッシャーも感じているようである。だが、自分が担当した絵本に対しての愛着が徐々に強くなり、活動を終えても手放しがたく自身で購入する学生もみられる。また、同じ作家の作品をそれぞれが担当するということで、「これは〇〇さんの絵本」という意識もサークル内で芽生えていく。いつも活動の最後にはそれぞれが担当した絵本を手で撮影を行うが、最初に絵本を手渡した時との学生の意識違いを強く感じる。(＜写真6＞参照)



＜写真6＞「宮西達也ワンダーランド展」における
サークル「ホビット」活動風景

普段の活動では、直前にとにかく絵本を選んで練習するという形になってしまうのに対し、「えほんのじかん」では、絵本自体への深い興味や関心を持つこと時間をかけて行うことができる。「美術館」という実践の場が、学生が一冊の絵本に向き合う姿勢というものを引き出すことについても大きな役割を果たしているといえる。また、刈谷市美術館での活動以前は、定期的な外部での活動は、月に2回の1件のみであったが、現在はこの他に、隔月1回の活動と、月1回の活動の2件が加わった。学芸員の方との関わりなどを通して、様々な場面で学びの場を提供してもらっているという実感が、地域の中での学びの大切さを認識し、地域での様々な活動への意欲にもつながっていったと考える。

5、おわりに

絵本は、誰かと一緒に読み合うことで、一人で読むのとはまた違った楽しみをもたらしてくれるものである。また、一冊の絵本に込められた作者の思いや、その表現の豊かさに触れることにより、絵本のもつ奥深さに気づくこともできる。

この「えほんのじかん」の活動では、その誰かと読み合うこと、研究的な視点で絵本を深く読むことを両輪として行うことを目指してきた。美術館の原画展という場は、その作家や作品についての全容や深い見方を示唆してくれるものであり、絵本に興味をもつ人々が集う場でもある。そういった意味で、美術館の原画展での活動は、学生の絵本研究、実践の場として、ここでなければ得られないものを得ることができたのではないだろうか。

絵本というものの特性を、教えられるだけでなく自ら学びとっていく力、さらに、絵本を深く捉えることによって絵本を周りの人と楽しむための力というものも培っていくことができると考える。ただ、絵本の「原画」が展示されている場での読み聞かせということにおいては、まだその活用は不十分だともいえる。今後の考察に繋げていきたい。

謝辞

本活動に際し、ご協力いただいた刈谷市美術館の皆様、感謝申し上げます。

付記

本研究は、平成 26 年度、平成 27 年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学課題研究助成を受けて実施した課題研究「刈谷市美術館『えほんのじかん』での学生の活動における地域協働と学生の学び」を含むものである。

なお、本文掲載の写真については承諾を得ている。

注

- (1) 平成 26 年度第三部入学生、平成 27 年度第一部入学生までで、以降はカリキュラムの再編が行われた。
- (2) 刈谷市美術館ホームページ <http://www.city.kariya.lg.jp/>
- (3) 愛知学泉大学家政学部家政学科家政学専攻の

学生が、原画展で展示された原画に描かれている衣装などを再現して展示し、会期内にワークショップなど親子で楽しめるイベントを開催する活動が、継続的に行われている。

参考文献

- 木内英実「地域交流を基にゼミナール活動の可能性を探る—絵本の読み聞かせとお話の会の実践を通して—」小田原短期大学研究紀要 36、pp.70-75、2006
- 藪中征代、吉田佐治子、村田光子「絵本をめぐる親子のやりとりの継時的変化 (3) : 文字のない絵本の読み聞かせを通して」日本教育心理学会総会発表論文集 (52) p.699、2010
- 相澤毅、岩山勉、川上昭吾、鈴木麻未、戸田茂、戸谷義明長沼健、野田敦敬、平野俊英、広濱紀子、山中敦子「蒲郡市生命の海科学館と愛知教育大学との連携」愛知教育大学教育創造開発機構紀要 vol.2、pp.131-139、2012
- 「絵本と絵本研究の動向 絵本研究会 2014 報告字のない絵本を考える」絵本 BOOKEND2015、pp.130-137、2015
- 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 学生サークル「ホビット」「絵本や紙芝居の読み聞かせを通じた地域貢献」地域活性化研究第 14 号、pp.88-89、2015
- 「美術館の絵本展における「えほんのじかん」の実践と学生の学び」日本保育学会第 69 回大会発表要旨集、p. 362、2016